

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第 卷二十四第

行發日一月二年一十和昭

## 論叢

農業者商工業者の税負擔 ..... 法學博士 神戸正雄  
 純限界生産力説 ..... 文學博士 高田保馬  
 幕末における幕府有司の開國思想 ..... 經濟學博士 本庄榮治郎

## 時論

日滿獨三角貿易の可能性について ..... 經濟學博士 谷口吉彦

## 研究

貨幣價格の運動 ..... 經濟學士 飯田藤次  
 所得概念より見た租稅論 ..... 經濟學士 島 恭彦

## 說苑

再び保險價額について ..... 經濟學士 佐波宣平  
 獨逸電力事業の統制 ..... 經濟學士 田 杉 競  
 收穫遞減法則に就いて ..... 經濟學士 山岡亮一

## 附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

# 研究

## 貨幣價格の運動

飯田 藤次

### 一 序

本稿で私は、ウィツクセルの「貨幣利子と財價格」<sup>1)</sup>を中心とし、これを可なり詳細に紹介し乍ら、此處に展開されて居る理論構成の二三の點に、多少の吟味を試みよう<sup>2)</sup>と考へて居る。彼は、彼の理論を展開する爲に三つの理論的準備を設くる。従つて順序は、先づ是に觸れてから組織的展開に進むに在る。

### 二 理論的準備

**其の一。相對價格と貨幣價格** 彼は二つの價格概念を提起し、一方を相對價格とし他方を貨幣價格と謂ふ。前者は財と財との交換比率であり、後者は財と貨幣との交換比率である。

1) Knut Wicksell; Geldzins und Güterpreise, 1898.

孤立的交換の場合に於ける交換比率の決定は、一定の限界内で動搖的である。<sup>2)</sup>けれどもこの想定は現實でなく、現實では、購買者販賣者間に於ける全面的な競争が、即ち公開市場が支配的である。此市場では、「無差別の法則」により多かれ少かれ固定的に決定され、市場に於いては同一商品に對して同時に唯一つの價格が、又は二商品間には唯一つの交換比率が存在する事に成る。<sup>3)</sup>此價格が一たび到達されれば、その財を交換せんとする個人にとつては、最早や與へられたものとして妥當し、個人經濟の均衡條件は次の様に現はし得る。即ち1各商品の限界效用はその價格に比例する。<sup>4)</sup>2與へられたる諸商品の全交換價值と獲得されたる諸商品の全交換價值とは相等しい。<sup>5)</sup>各特定商品に對する個人的需要の全體は、諸財に對する全體市場需要を構成し、個人的供給の全體は、此等諸財の全體供給を成すが故に、市場均衡は各特定商品に對して需給が相等しい様な價格關係の場合に可能と成る。<sup>6)</sup>若し一商品に對する需要に販賣者が自己消費のために保留する量をも包含するとすれば、需要はその市場の全體供給と等しく成る。<sup>7)</sup>より長期を問題とすれば生産と消費との均衡が現はれる。<sup>8)</sup>

斯くて相對價格の變動は、生産條件の變動、技術的進歩の必然的結果であり、<sup>9)</sup>人間的統制の羈絆から或る範圍に於いて解放されて居る。<sup>10)</sup>「市場に於ける個々の商品又は商品群の相對價格が、誤つて評價されるならば、夫處から生じたる此等諸商品又は商品群の供給と需要間の、且つ生産と消費間の不均衡によつて、早かれ遅かれ必然的修正が現はれる。」<sup>11)</sup>

2) Wicksell; Geldzins, S. 18. Wicksell; Lectures on political economy, translated by E. Classen, 1934. S. 49-51. 3) Lectures, p. 52.  
4) Lectures, p. 53. 5) Lectures, p. 47.  
6) Lectures, p. 53-54. 7) Lectures, p. 54.  
8) Geldzins, S. 18. 9) Geldzins, S. 1.  
10) Geldzins, S. 4. 11) Geldzins, S. 21.

市場に二個以上の商品が存在するや否や、完全な均衡は直接交換のみでは到達されず、間接交換が夫れを補足しなければならぬ、即ち殆んど全ての現實的交換は間接に貨幣の媒介を通じて行はれる。夫處で貨幣を、「夫の役割は純粹に形式的である」<sup>12)</sup>ものとして把握すれば、「取引が終了した後の結果は、諸財は單純に手を代へたに過ぎず、使用された貨幣の總額は正確に最初と同一の手に横はる。斯くて事實上は、直接にではなしに少くとも一部は間接に、諸財は諸財と交換された譯である」<sup>13)</sup>。即ち。貨幣が介在する事に成つたにしても、限界效用の法則は未だ夫の有效性を喪ふものではなく、個人的均衡の第一條件も第二條件も成立して留まる。故に「各人は結局、得ただけの貨幣を支出する」<sup>14)</sup>に過ぎず、従つて「交換が終つた後に、使用された全ての貨幣が、その最初の所有者に歸るものならば、現實の交換行爲に於いて、諸財の一單位が多數の貨幣單位に又は少數のそれに交換されたか……は、その他の全ての人にとつてと同じ様に彼に採つて完全に何うでも良い事柄である」<sup>15)</sup>と謂ふ事に成る。

以上敘べ來たれる事に依つて瞭かな様に、貨幣の介在は、商品の相對價格に對して何等の影響も持つ事が出來ない、従つて是を反對に視れば、「商品交換夫れ自體と財の生産消費關係に於ける夫の前提條件とは、商品の交換價值に採つてのみ決定的であつて、貨幣價格の絶對的高さには、全く何等の直接的影響も及ばし得ない」<sup>16)</sup>譯である。

我々が今敘べた處に依れば、貨幣は相對價格に對しては形式的機能しか持たない事が瞭かに成

12) Lectures, p. 65.  
13) Lectures, p. 65.  
14) Geldzins, S. 21.  
15) Lectures, p. 67-68.  
16) Geldzins, S. 21.

つたのであるが、夫の同じ貨幣が、貨幣價格に對しては實質的な機能を持つのである。即ち「眞實には勿論（諸財の一單位が多數の貨幣單位に又は少數のそれに交換されたか）と謂ふ事は、決して完全に無關係な事ではない。全ゆる市場に於いては、貨幣がより以上の重要度を持つて居る人々がある。……或る特定市場取引に於ける貨幣機能は、現實に於いては形式的であるのみならず實質的でもある。」<sup>17)</sup>従つて「貨幣價格の規制者は——相對價格の規制者に反して——決して商品市場（又は財生産）自體から現れ得ずして、恐らく此の市場と貨幣市場との關係に於いて、最廣義の貨幣市場に於いて求められ得る。」<sup>18)</sup>

さて此處に於いて、貨幣が如何なるものとして把握されてあるのだらうか、夫れを問題としよう。

いま間接交換の結果を観察すれば、それはつまり物質代謝財と財との交換に歸着する、財が財に對して交換されたのであり、貨幣と成つた財は、たゞかゝる物質代謝の媒介に役立つたに過ぎない。斯くして貨幣は、諸財の單なる交換手段として現はれ、しかも流通過程によつて特徴づけられたる交換手段すなはち流通手段として現はれる。貨幣に關する限り夫の役割は純粹に形式的である。」と謂ふ言葉は、正に以上の様に解さるべきである。

流通手段の分量に關しては、マルクスに於いては、彼の「苟くも何等かを證明する爲には、ヒュームは、一定の記數法の下において、使用される數字の數が數値の大きさに依存するのではな

17) Lectures, p. 68.

18) Geldzins, S. 22.

くて、逆に、數値の大きさが使用される文字の數に依存することを示すべきであつた。」と謂ふ譬喩にも瞭かであるが、ウィツクセルに依れば何回も敍べたやうに「諸財の一單位が多數の貨幣單位に又は少數のそれに交換されたか……は」何うでも良い事に成つて居るのであり、マルクスの流通手段の分量に關する法則と相容れないものと成つて居るのである。けれどもマルクスが「けだし紙幣は、正しき分量で發行された場合には、價值章標としての紙幣に特有でない運動を行ひ、紙幣に特有な運動は、直接に諸商品の變態からは生じないで、金に對するその正しき割合の破れたことから生じるからである。」<sup>20)</sup>と敍べ、紙幣に特有な運動に就いて「……紙幣の價值は流通するその分量に依存する。……諸商品の價格は、流通する紙幣の分量の變動するにつれて、騰落するかに見える。……紙幣はいくら膨脹しても流通にはいり込むかに見える。」<sup>21)</sup>と敍べるに到れば、最早彼等の間に横はる對立は消え去るのであり、ウィツクセルが、貨幣を如何なるものとして把握したかも明瞭に成るのである。彼は貨幣を流通手段として孤立化し、しかも價值章標と規定するのである。

貨幣と財との交換比率が貨幣價格であるとすれば、ウィツクセルの頭を支配して居た貨幣價格とは、正に價值章標と財との交換比率であるべき筈である。彼が、貨幣は相對價格に對して形式的機能を持ち貨幣價格に對しては、實質的な機能を持つと敍べるのも、此の意味に於いて瞭かに成る。

19) 河上・宮川譯；政治經濟學批判、313頁。

20) 政治經濟學批判、244頁。

21) 政治經濟學批判、243頁。

従つて若しマルクスの價值章標に關する理論が正しいものとすれば、ウイツクゼルの今後の展開は、單に無用なものに過ぎない。

## 其の二。學說否定

彼は生産費說否定の締めくゝりとして次の様に言ふ。即ち。貴金屬の生産關係が貨幣の購買力に及ぼす影響は、極めて長い期間を採りしかも此原因が絶えず同一方向に作用するものとすれば、夫重要さは全ゆる其他の要素に勝つて居るのである。けれども年々とか毎拾年とかいふ短期を採れば、商品價格の高さと金生産條件の容易化或は困難化との間に、平衡を認める事が困難である。<sup>22)</sup> 然るに實業生活にとつて重要なのは、「相對的に短期——10年15年20年迄——の價格變動と貨幣の價值動搖とである。<sup>23)</sup>」故に、生産費說の主張が如何に論理的であり自明的であらうとも、「近代の貨幣經濟の實踐的に最も重要な問題を問題とするや否や」その無力さを曝露すると謂ふのである。ウイツクゼルが此處で、極めて長期の價格と言ひ比較的短期の價格と謂つて居るのは、夫れく相對價格と貨幣價格とを意味する事明瞭であるが故に、換言すれば生産費說は相對價格の説明に關しては論理的に拒否出來ないにしても、彼の貨幣價格の説明に關しては無力であるといふ事に成る。此處から次の事が結論される。即ち彼は、生産費說が彼の意味する貨幣價格の説明に關して無力である事を指摘する爲に、生産費說の相對價格に關する説明が、夫のまゝで、彼の意味する貨幣價格を説明する事に成つて居ると想像し、前者が後者を説明し得ない事を以つてするに過ぎない。

22) Geldzins, S. 29.

23) Geldzins, S. 30.

彼の頭腦を支配して居る貨幣價格とは、正に我々が規定した様なそれであるが故に、然も夫れを價值章標に特有な運動として吟味する事を忘れたが故に、當然の論理は彼をして數量説に赴かしめ「數量説は、一般的價格水準の動搖に對する今迄敍べた全ての説明方法の内比較的最も正しい方法であるし、その對象を幾分合理的方法で説明しようとする正に唯一つのものである。」と敍べしめるに到つたのである。

けれども彼に依れば、「數量説は此際貨幣量の増加乃至は相對的減少に常に價格を高め或は低める様に作用する傾向を歸する限り——然も先づ利率に對して反對の方向に作用する事によつて——正しい。けれども貨幣的變動は此處では——とも角極めて長い期間を問題にしないならば——單に一つの要素に過ぎない。」<sup>25)</sup>のである。何故なら。彼に依れば數量説は、最も嚴密に *ceteris paribus* の想定が固守された場合にのみ理論的に妥當なものとされるのであり、此處に想定される事情の内、流通速度一定といふ想定が——その他の諸事情は多かれ少かれ是に還元される——最も重要である。<sup>26)</sup>此想定は、「純粹な現金經濟」<sup>27)</sup>の場合には「殆んど變化しない大きさ」として、「單純信用」<sup>29)</sup>の場合には「幾分彈力的な大きさ」<sup>30)</sup>として現はれ、夫の限りに於いて數量説の論結は未だ維持されるのである。然るに「組織的信用經濟」<sup>31)</sup>の場合には、一般に何等の貨幣も流通せず、國內取引の目的のために貯藏される事を要せず、支拂手段又は購買力は恐らく隨意に需要に應じて供給されるが故に、數量説は少くとも外觀上全ゆる立脚點を喪ふのである。<sup>32)</sup>からである。

24) Geldzins, S. 45.  
 26) Geldzins, S. 38.  
 28) Geldzins, S. 53.  
 30) Geldzins, S. 55.  
 32) Geldzins, S. 68-69.

25) Geldzins, S. VIII.  
 27) Geldzins, S. 45-53.  
 29) Geldzins, S. 53-56.  
 31) Geldzins, S. 56-73.

かくてウィックゼルは、數量説に置き代へる爲の理論を構成するのであるが、簡單には次の方向にである。即ち「貨幣量の價格に對する作用を屢々はるかに凌ぐ所の他要素は、貨幣利子の照應する變動に依つて伴はれる所の——常に除々にではあるが——自然的資本利子自體の獨立的運動の中に成立する。」<sup>33)</sup>といふ方向にであり、「流通銀行券量が銀行のその操作の結果、増加するかしないかは、畢竟此操作夫れ自體價格騰貴を惹起するに適して居るか居ないかに依存しなければならぬ。換言すれば、擴大せる銀行券發行夫自體において<sup>34)</sup>はなく、夫の發行に誘因を與へた所の銀行側に於ける信用低下に於いてこそ、價格騰貴の眞原因を見出さねばならない。」<sup>34)</sup>といふ方向にである。彼は數量説に於ける貨幣量に代ふるに、利子率の變動を以つてするのであるが、數量説の如く單純な利子率の變動ではなくして、自然的資本利子と比較しての利子率の變動を<sup>35)</sup>決定的モメントとするのである。

### 其三。自然利子と貨幣利子との關係

彼は數量説に於ける利子運動に「極めて重要な修正」<sup>36)</sup>を行ひ、次の様に言ふ。「貨幣利子は夫れ自體で高かつたり低かつたりする譯では決してない。夫れの高はは全く」<sup>37)</sup>自然的資本利子と比較しての事である、と。従つて何時でも自然的資本利子は貨幣利子の「比較の基軸」<sup>38)</sup>と成る。

此處で自然的資本利子と謂ふのは「若し眞實資本が貨幣の媒介なしに實物で貸附けられるならば、需給によつて決定されるであらう處の夫の利子率」<sup>39)</sup>であり、夫上限は「生産が支拂はれたる勞

33) Getdzins, S. VIII.

35) Geldzins, S. V.

37) Geldzins, S. V.

39) Geldzins, S. V.

34) Geldzins, S. 79.

36) Geldzins, S. V.

38) Geldzins, S. 98.

註。

銀地代等々の總額以上に與へ得る剩餘」<sup>40)</sup>なのであるが、略々夫れだけは企業家に依つて支拂はれねばならない。

此「自然的資本利子の高さは、一般的に敍ぶれば、生産の収益力、現存する固定資本と流動資本の量、労働需要者の數、土地力の供給等、概言すれば、集つて當該國民經濟の夫の時々の經濟事情を構成する多くの諸事情に、依存する」<sup>41)</sup>のであり、此等諸決定根據の變動とともに變動するが故に、「自然的資本利子の高さは、何等固定的な不變的な大きさでもない事自明である。」<sup>42)</sup>「自然的資本利子は夫れ自體變動の大きさであるばかりでなく、夫の運動は貨幣利子の運動に比較した場合に、一般的にはより前に動く事に成つて居る。此事は全ゆる處に散在する多くの文章に依つて確證する事が出来るが、例へば「必然的に然し乍ら徐々に、貨幣利子の照應する變動によつて伴はれる所の自然的資本利子自體の獨立的運動」<sup>43)</sup>「貨幣利子率は結局は眞實資本の過剰又は稀少によつて決定され得る、けれども一應は貨幣の過剰又は稀少にのみ依存する」<sup>44)</sup>等夫他。

自然的資本利子運動の先行性に對しての貨幣利子運動の隨伴性は、次の如くに證明される。第一には「銀行指導者は經驗に従ふ。即ち彼は、全く變動せる事情に壓迫され雷やむを得ずのみに、夫銀行の業務指導に際して既に採用されて居り眞價が認められて居る習慣から離れる。」<sup>45)</sup>と謂ふ事情に依つて、第二には「特に銀行の利子政策に關しては、個々の銀行も個々の國の銀行も、夫利子政策を他銀行の行爲とは無關係に獨力で規制し得ないといふ事實に」<sup>46)</sup>依つてゝある。

40) Geldzins, S. 95.

42) Geldzins, S. 97.

44) Geldzins, S. 99.

46) Geldzins, S. 110. u. 102-103. 參照。

41) Geldzins, S. 97-98.

43) Geldzins, S. VIII.

45) Geldzins, S. 110.

「貸金に對する人爲的に高められたる需要、かくて普通の事情の下には生じないであらう所の需要<sup>47)</sup>」といふ言葉に瞭かなやうに、我々が上敍せる如き自然的資本利子の先行運動は、一般的に普通の事情の場合に現はれるのであつて、特殊的には貨幣利子が先行する事も在るのである。

理論的準備は既に成つた。我々は組織的展開に入る事にしよう。

### 三 組織的展開

**第一齣。序** 大概の國民經濟的問題にとつては、自然的資本利子と貨幣利子との差異を無視する事が許される、けれども「夫れを等閑に附する事が出来ない唯一つの場合がある。夫場合と謂ふのは、即ち正に貨幣で表はされた商品價格の變動が問題である場合である。」<sup>48)</sup>何故なら此價格の平均的變動こそ兩利率の當該差異に夫の本源的動力を持つて居るからである。我々の此處での問題は正に夫れである。

事象を單純化するために次の想定がなされる。我々の研究對象と成る一國の諸關係は、正に研究すべき變化とその結果とを除けば、夫他は完全な靜態である。賃料財は、その維持以外に何等の變動にも曝されず、可動的眞實資本は資本家の意向に依つて夫の額不變であり、生産過程の長さは何れの事業に於いても相等しく一年である、技術的關係がその延長も短縮も行はしめない場合の如くである。生産は全て經濟年の初めに於いて同時に初まり、其年の終りに完成財と成つて夫

47) Geldzins, S. 80.

48) Geldzins, S. 124-125.

姿を交換過程に現はす。可動的眞實資本の總額は前年に於ける資本利子額を控除された享樂財の總額である。

企業家は何等の貨幣も持つて居ない、けれども原料を購入し勞銀地代を支拂ひ生産期間自ら生活する爲に、貨幣を必要とするのであるが夫れは銀行から借受ける。資本家は「現存する享樂財の現在の所有者」<sup>49)</sup>であり商品商人と觀念されるのであるが、勞働者夫他の者は夫勞銀等を經濟年の初めに前貸されるが故に、商品を全年に亘つて貯藏する義務から解放される、従つて固有の商業利潤を看過し得る事となる。貸金利子と預金利子との間に一定の差異が在るべき筈だが此處では相等しとする。

**第二齣。正常利子率** 企業家は經濟年の初めに銀行から、前年の間に完成された享樂財の總額から資本家の利子額を控除せる價值額に等しい貨幣資本 $K$ を借り、勞働者地主企業家自身(以下單純化の爲勞働者だけを舉げる)へ支拂ふ。勞働者は此 $K$ を、全經濟年に亘る生活資料を購入する爲に資本家へ商品商人へ支拂ふ。彼等は此額を銀行へ預金する。

今貨幣利子が自然利子と同様に $i$ であるとすれば、企業家は夫年の終りに銀行に對して $K(1+i)$ と謂ふ負債を負ふ筈であり、銀行は資本家に對して同じく $K(1+i)$ なる義務を負ふ。經濟年が経過した後生産物は完成され先づ企業家の手に横はる事に成るのであるが、完成財總額の全體價值は普通の價格が支配して居る場合には $K(1+i)$ である、夫して假定によつて經濟は

靜態であるが故に、企業家の報酬は「事業指導の爲になされた努力への報酬」に限定される。

資本家—商品商人は、此全體價值に等しい彼等の銀行預金を小切手に依つて銀行から引出し、此小切手を企業家に與へて彼等の完成商品を手に入れる。夫内利子額  $\frac{K}{100}$  に照應する商品部分を相互に交換し來年の消費の爲に側に置く。此爲に必要な貨幣操作は同様に小切手に依つて成就される。利子額を控除せる商品部分は、次年度の生産の爲の眞實資本として、その價值は普通價格の場合には  $K$  と成る—商品形態で側に置く。企業家は資本家から得た小切手  $K(1 + \frac{r}{100})$  を銀行へ支拂ひ、銀行は之を資本家に支拂ふが故に、彼等の間の貸借は完全に決濟される。

今説明した限りでは事象は常に此軌道をめぐるのであり、「此等全ての内には價格を高め得或は低め得る何物も横らない。譬ひ變化せる生産條件が、即ち例へば何れかの商品種類が前よりも比較的僅かな勞働夫他の生産諸力の支出によつて生産されるやうな技術的進歩が、種々の商品種類の相對的交換價值の間に絶えず差異を惹き起すに違ひないにしても、何故に（貨幣）價格の一般的水準が變動するのかわからないのである。」<sup>50)</sup> 此利子率を彼は正常利子率と呼ぶ。即ち「國民經濟的關係の夫々の時と夫々の状態とには、商品價格の一般的水準を最早上へも下へも動かす傾向を持たない様な貨幣利子の平均的利子率の高さが存在する。我々は是を正常利子率と呼ぶ。夫の額は自然的資本利子の同時的狀態によつて決定され、是と共に上り又は下落しなければならぬ。」<sup>52)</sup>

### 第三節。價格騰貴

「普通の事情の下では」自然的資本利子が先づ動く筈であるから、此處で

50) Geldzins, S. 130. S. 95. 參照。

51) Geldzins, S. 96.

52) Geldzins, S. 111.

も「例へば抑壓された勞銀(勞働者數の比較的増加)低下したる地代又は夫他の賃料の爲に、或は最後に技術的進歩の結果勞働と自然力との高まれる生産力の爲に、自然的資本利率が(二十)％に成り然も一方銀行は依然として通常利率又は割引率 $i$ を固守する」としよう。經濟年の終に於ける生産物の全體價值は、普通の價格の場合には $K(1+i)^{t+1}$ であるのに、企業家は銀行に對して $K(1+\frac{1}{100})$ だけの負債を負つて居るに過ぎない。夫差額 $\frac{1}{100}K$ は、當然今や企業家の剩餘利潤と成り、彼等は照應する貨幣額を相互に交換して是を實現し次年度消費の爲に側に置く。生産物總額の殘部 $K(1+\frac{1}{100})$ だけは普通の價格で資本家に販賣される。價格は未だ何等の變動も被らない。<sup>54)</sup>

企業家が年々一定額の剩餘利潤を手に入れると各企業家は夫業務を擴大し新しき企業家の企業家圏への流入が生じ擴大生産への傾向が現はれる。<sup>55)</sup>此の傾向は直ちに説明せんとする企業家の支拂可能性によつて一定の規定を受ける。即ち。年利率が前年より一パーセントだけ低く成つたとする。企業家は資本家から現金を借りてその貨幣を現在勞働力の爲に支出する。其勞働力を使つて三ヶ月後に生産物が完成するものとすれば、然も借りた資本は三ヶ月後此生産物を販賣した代金から返済されるものとすれば、企業家は勞働力に現在、譬ひその生産物が普通の價格で賣れるにしても自己の損失なしに、 $\frac{1}{2}$ パーセントだけ多く支拂ひ得る筈である。<sup>56)</sup>「一億麻克に四パーセント支拂ふも一億三千三百萬麻克に三パーセント支拂ふも同じ事に成るのだから、 $33\frac{1}{3}$ パーセントだけ高い價格を支拂ひ得る筈である。<sup>57)</sup>」

53) Geldzins, S. 130.  
 54) Geldzins, S. 131.  
 55) Geldzins, S. 131.  
 56) Geldzins, S. 84.  
 57) Geldzins, S. 84.

年々企業家の下に生ずる剩餘利潤は擴大生産への傾向を生じ、此傾向は正に敍べた企業家の支拂可能性に依つて一定の規定を受けて現はれる。けれども「生産の現實的な擴大は差當り生ずるものではない。何故ならその爲には眞實生産諸力即ち勞働と土地用役の擴大が必要であり、かゝる擴大によつて現はれたる本源的生産諸力によつて（より長い、夫れ故に）より収益力のある生産過程が形成され得るからである。」<sup>58)</sup>かゝる傾向と現實との對峙が現はれるが故に、換言すれば「信用低下によつて生じたる）原料勞働土地用役に對する高まれる需要並びに消費財に對する直接間接の高まれる需要が、供給を越へるといふ事情が、價格を上昇せしめる決定的モメントを成す。」<sup>59)</sup>即ち勞働力の價格が上昇する。だから彼は次の様に言ふ。「傾向と現實との此重要なる區別に對する看過こそ私にして誤なければ、信用の價格に對する影響が今日まで、何故かくも甚だしく不明瞭のまゝであつたかといふ主要根據の一つである。」<sup>60)</sup>と。

價格が何れだけ上昇するかは、企業家の支拂可能性にその範圍を、企業家間に於ける擴大生産の爲の競争にその拍車を見出すのであり、競争による拍車が強ければ強い程價格は支拂可能性の範圍を追詰められ、極端な場合には信用低下の率だけになる。故に信用低下が長期貸金の利子にも影響するやうに成れば、はなはだしい突發的な物價騰貴が現はれるのである。<sup>61)</sup>

「斯くて全ゆる貨幣勞銀と貨幣賃料とが高められるが故に、企業家は生産の擴大が一般的に成功しないにも拘らず當該年の生産の爲に増加せる貸附資本を銀行に需めねばならない。」<sup>62)</sup>此増加せ

58) Geldzins, S. 131-132.

59) Geldzins, S. 82. 註。

60) Geldzins, S. 82. 註。

61) Geldzins, S. 85. S. 83-84. 參照。

62) Geldzins, S. 133.

る可變資本が労働者に支拂はれるや否や、後者は來るべき年の生活資料購入の爲に資本家に支出する。然るに資本家の手下に在る商品資本は前年と同額である。需要が供給を超へる。商品資本の全體價值Kは利子低下に比例して $1.01K$ に騰貴する。

企業家は經濟年の終には、享樂財の總額は前年と相等しいがその全體價值は一パーセントの價格騰貴の爲 $1.01K(1 + \frac{1}{100})$ であるのを發見する、彼は銀行に $1.01K(1 + \frac{1}{100})$ だけ負債してゐるが故に此の内からそれだけ支拂へば銀行と彼との債務は決済され、殘餘の $\frac{1}{100}K$ は剩餘利潤として自己の手に落ちる、資本の一パーセントである。資本家は商品資本の騰貴せる代金 $1.01K$ を銀行へ預金としてゐるが其年の終りに新たに生産された生産物を購入する爲に $1.01K(1 + \frac{1}{100})$ を引出すが故に、彼と銀行との間の債務は決済される。労働者は増加せる可變資本を手に入れるが、生活資料もまた騰貴するが故に何等の變動も見ない。

#### 第四節。累積的騰貴

「貨幣價格の規制者は……廣義に於ける貨幣市場に於いて求められね

ばならない。」<sup>63)</sup>従つて「國民經濟全體にとつては、一度び到達せる一般的價格狀態を何れかの方向へ動かすべき何等の誘因も存在しない。例へば價格騰貴が一樣に全ゆる商品群に擴まるならば、結局たゞ生産と消費に對してのみ眞實に關聯せるやうな相對價格の均衡が、再び現はれる。」<sup>64)</sup>

以上の如き「貨幣價格の形式的性質」<sup>65)</sup>と一定の「惰力」<sup>66)</sup>によつて、一度び騰貴せる價格は、反對に作用する力さへなければ其まゝに留まる性質を持つて居る。故に事象は次の様に成る「普通の

63) Geldzins, S. 22.  
64) Geldzins, S. 86.  
65) Geldzins, S. 86.  
66) Geldzins, S. 86.

販賣價格を得るだらうと謂ふ前提の下できへも、三ヶ月後に販賣すべき商品に對して、信用が安くなつた爲より、高き購入價格（現金）を支拂ひ得た實業家は、此期間が経過すると普通以上の價格で商品を販賣し得ると謂ふ快き發見を成すだらう。今や彼が同様な取引を新な三ヶ月の爲に契約するならば、夫の場合極めて當然現れる事なのだが、現在支配しつゝある價格が彼の計算の基礎となるならば、爾後彼は前の信用條件の下でも後の（高まれる）購入價格を支拂ひ得るだらう。然し彼が更に銀行へは當時の低利子だけを支拂ふを要するとすれば、彼は何の損害もなしに猶ほより、高き自己費用を擔ひ得る（そして全ゆる蓋然性に依つて擔ひもしなければならぬだらう）等々、だから此處では等しい大きさの價格騰貴が、三ヶ月毎に繰返されるだらう。<sup>67)</sup>」前の記號で瞭かにすれば可變資本はもう一パーセントだけ多くなる。即ち  $1.02K$  であり商品資本は等しく夫だけ上昇する。夫年の終に於ける享樂財總額の全體價值は  $1.02K(1 + \frac{1}{100})$  であり、企業家の銀行債務は  $1.02K(1 + \frac{1}{100})$  であるが故に、企業家の貨幣で表現された剩餘利潤は  $\frac{1}{100}$  である。貨幣利子が依然夫處に留まれば價格は累積的に高まる。

此の基本的價格騰貴は、種々なる夫の他の事情によつて拍車をかけられるのであるが、夫の敘述を此處で省略する。

### 第五節。價格の發條作用

さて此處では次の課題が提起される。即ち「その貨幣利子を任意の高さに固守する力を、一般に金融機關が持つてゐるか何うか。又は貨幣利子は、貨幣市場の需

給運動の結果自然的資本利子の夫時々の状態に、速かれ遅かれ適應しなければならぬか何うか。と謂ふ問題<sup>68)</sup>である。此問題に關して次の様に言ふ。「私見によれば次の事を前提しないならば此現象は全く不明瞭に成る、即ち兩利率間に於ける夫々の持續的差異は、財價格に對して衝擊を、しかも貨幣事情の事實上の姿の場合に、速かれ遅かれ貸附利子を自然的資本利子のその時々の高さに繋ぎ留める處の、常に繰返されしかも進行的である處の衝擊を、與へると謂ふ事を<sup>69)</sup>」かくて彼によれば「價格は、謂はゞ自然的資本利子と貨幣利子との間の力の傳達を媒介する處の「然し夫自體充分に延ばされ或は縮められた後に初めて」はあるが「螺旋狀發條である。」と考へられて居る。「純粹に現金經濟の場合には、發條は短かく且つ強い。信用状態と銀行状態とが發展して居る程度に應じて、より長く且つより収益的に成る。」<sup>71)</sup>

銀行が貨幣利子を自然的資本利子以下に固守し、價格を累積的に何時迄も上昇せしめ得るものだらうか。此問題に關して今銀行の支拂能力だけが眼中に入り信用經濟が全ゆる國々で完全に發展して居ると謂ふ事を想定するならば、此處では工業用途への貴金屬使用といふ事が限界になる。即ち貨幣の餘りに少ない購買力は金生産を阻喪せしめ、他の事情にして同一ならば金の工業的消費が擴大する。消費が生産を超へる。銀行の保有金量が減少する。貸金利子の引上げが強制される。鑄貨や銀行券が著しく流通して居る現實的諸事情の下では、その強制は極めて速く現はれる。價格騰貴は夫影響を金の生産消費關係にのみならず極めて高度に貨幣流通の需要に及ぼす。鑄貨

68) Geldzins, S. 99.  
69) Geldzins, S. VIII.  
70) Geldzins, S. 125.  
71) Geldzins, S. 125.

と銀行券とは公衆の下に於いて銀行の使用し得べき準備金よりはるかに多く流通して居るが故に、この事情の場合には可なり小さな騰貴が起つても使用し得べき銀行準備は廣汎な減少を生ずるのである。貸金利子引上の強制が現はれる。<sup>72)</sup>

貨幣利子を自然的資本利子より高く固守する事が出来るものだらうか。此場合には銀行の支拂能力が最早問題にならずして、銀行の經濟的利害關係が問題の中に登場する。<sup>73)</sup> 商品價格の進行的低下の爲金の購買力が増大する。金の生産が増大し金の工業的消費が減少する。價格下落の爲流通は益々大なる額の鑄貨と銀行券とを銀行へ歸す。銀行は是等貨幣總額に利子を附せねばならぬ事は當然であるが、私人の貸附業務が銀行と常に競争してゐるが故に貸金利子と預金利子とを殆んど等しくしなければならぬ。銀行が利子附有價證券國債等へその預金を投資しても夫處から解放された貨幣は再び投資を求めが故に、貨幣過剰を防止する事が出来ない。銀行は利子負擔に堪えなくなる。<sup>74)</sup> 利子低下の強制が現はれる。

次に。此等の事が、貨幣利子が自然利子以下に止まる場合に商品價格の繼續的上昇を妨害し、貨幣利子が自然利子より高くなつてゐる場合に價格の漸次的下落を妨げる程急速に起るものだらうか、と謂ふ問題が現はれて來るのであるが此に關しては我々は嚮に瞭かにした貨幣利子の隨伴性を擧げるべきである。

我々はウィツクゼルの貨幣價格に關する理論を、價格騰貴と言ふ面に於いて追跡して來た、然

72) Geldzins, S. 104-105.

73) Geldzins, S. 107.

74) Geldzins, S. 107-108.

し以上の展開は正に夫のまゝ價格下落の面へも當嵌るのである。

#### 四 批 判

生産費説を否定し切つたウィツクセルは、次に數量説を「比較的最も正しい方法である」と規定<sup>75)</sup>しはするが結局是をも乗越へようと企圖したのである事は嚮にみた。此處で私は、彼が果して數量説の埒を乗越へてゐるか何うかといふ方向に、批判の大體を向ける事にしよう。

彼によれば資本利子と貨幣利子との間の差異こそ價格を變動せしめる決定的要因と看做されてゐる。然してこの兩利子率間の差異は一般的には資本利子の先行性によつて生ずるのであるが、その先行的上昇は「例へば抑壓されたる勞銀(勞働者の比較的增加)低下せる地代又は其他の賃料の爲、或は最後に技術的進歩の結果勞働と自然力との高まれる生産力の爲に……」<sup>76)</sup>現はれるとされてゐる。けれども彼の全體系に於いてはかゝる生産力の上昇は、生産期間の延長に依つてのみ可能なる筈である。然し我々は經濟年は一年であつて「技術的關係が夫の延長も短縮も行はしめない場合の如くである」と前提して理論を展開して來た。價格上昇のそもゝの第一歩に何等の齟齬もないといと何うして言ひ得るだらうか。

「(信用を低下する事によつて生じたる)原料勞働土地用役等に對する高まれる需要並びに消費財に對する高まれる直接間接的需要が、供給を越へるといふ事情が、價格を上昇せしめる決定的モメント

75) Geldzins, S. 45.  
76) Geldzins, S. 130.

を成す。」と敍べる事によつて勞働力騰貴の最後の契機を説明した。けれども一般的には「たゞ購買力を以て裏づけられたる欲求のみが需要と稱せられる」<sup>77)</sup>筈である。従つて、此處で我々が問題にしてゐる需要は我々が前に分析した如く企業家の支拂可能性によつて規定づけられたる擴大生産への傾向であるが故に、今定義した概念に照應するためには當然支拂可能性は單なる可能性ではなくて貨幣量の直接的投影であり、夫自體貨幣量と同一の作用を有するものと考えべきである。若し支拂可能性が單なる可能性であるならば、擴大生産への傾向は單なる欲求となり價格が上昇する筈がないのである。

今單なる支拂可能性によつて規定されたる傾向によつて、換言すれば貨幣量が問題の前面に現はれず利子率の變動によつて、彼が言ふ如く價格が騰貴したとしよう。彼の言ふ所によれば次の様になる、即ち「かくて全ゆる貨幣勞銀と貨幣賃料とが高められるが故に、企業家は生産の擴大が一般に成功しないにも拘らず當該年の生産の爲に増加せる貸附資本を銀行に需めねばならぬ」<sup>79)</sup>従つて價格が上昇して後、貨幣量が需められてゐるのである。この事は流通手段の分量に關する我々が前に敍べた彼の法則と衝突する。この衝突を免れ得る爲には支拂可能性を貨幣量の直接的投影と考ふべきである。

さて以上の根據から支拂可能性を貨幣量の直接的投影といふ結論に導いたのであるが、この結論は彼が嚮になした數量說批判、即ち「數量說は此際、貨幣量の増加乃至相對的減少に價格を高

77) Geldzins, S. 82. 註。

78) 高田教授、經濟學新講、44頁。

79) Geldzins, S. 133.

め或は低める様に作用する傾向を常に歸する限り——然も先づ利子率に對して反對の方向に作用する事によつて——正しい。けれども貨幣變動は此處では——とも角極めて長い期間を問題にしないならば——單に一要素に過ぎない。前者の作用をはるかに凌ぐ他の要素は、必然的に然し乍ら除々に貨幣利子の變動によつて伴はれる所の自然的資本利子自體の獨立的運動の中に成立する。<sup>80)</sup>なる批判に矛盾しないだらうか。自然的資本利子を比較の基軸として規定した以外に何處に數量説を揚棄した點が在るだらうか。然も自然的資本利子の概念を彼の説明にとり入れたのは、番價格説明の爲に貨幣量を前面へ持出さないためであつた筈である。

同じ事の繰返しであるが以下の點を注意する事にしよう。彼に依れば資本家側に存する商品資本の價值増大は、直接に勞働者が支出する増加せる貨幣量によつて説明されてゐる。勞働力の價格は利率差によつて、生活資料の價格は貨幣量によつて。二元的説明。

流通手段の分量に關する彼の法則との矛盾は次の場合にも現はれてゐる。即ち彼によれば價格が上昇すると流通は通貨と紙幣とをより多く必要とし、價格が下落するとその反對が——流通が鑄貨と紙幣とを銀行へ歸す事に成つて居る。けれども彼の説明の中には、何故に流通が貨幣を必要とし又は不必要とするのか、或は何故に一定の價格の場合に流通は一定の貨幣量を必要とするのか、といふ事に關して何等の確證もないのである。